

●ほめ殺し商法

本日は巷に蔓延する詐欺商法、悪質商法のお断りでございます。

人間というものは、褒められると嬉しいものですな。

とくに趣味の成果。スポーツみたいに勝ち負けのはっきりしているものと違いまして、絵画、文芸、音楽、そういった芸術なんかは、なかなか点数のつけられるものではない。うまい下手は勿論ありますけれど、「あなたの絵は個性的です」とか、「これは独創的だ」、なんて言われると、それはそれで嬉しかったりします。

褒めるところがないから、独創的だの個性的だの、奥にキラリと光るモノがある、今駄目だが将来楽しみ、いろんな褒め方があるものでございます。

でも当人はやはり褒められると嬉しい。そういう人間の弱さにつけこむ商法もあつたりいたします。

夫「男は定年になると駄目だなあ。なんにもやることがないんだ。友達はいない、趣味はない。それじゃ、いけないと思って、この間から俳句なんぞをひねってみたんだけどな。古池やぼうふうら湧くので掃除しよう、名月やお煎餅にさも似たり、夕涼み黒子に見えるスイカの種かな……、うーん、なかなか難しいなあ。やはり、新聞の俳句覧を見て勉強するかな。どれどれ。(新聞を広げて) あっ！ おいマジかよ。俺の作った俳句、新聞に投稿したら掲載されてるじゃないか。おい、母さん母さん」

妻「なんですよ、お父さん、大きな声で」

夫「ふふふ。新聞を見たまえ」

妻「なんですよ。えーと、下半身露出男逮捕……。女の子からキャーキャー言われたかった」

夫「なんでそんな記事を読むんだよ。そうじゃない。その下だよ」

妻「下半身露出男の下？ 足の裏露出男とか」

夫「そんなもの見せてどうするんだ。俳句だよ俳句」

妻「俳句？ 俳句がどうしたんですか？」

夫「その三番目の、博多っていうの、俺なんだ」

妻「なんで、あなたが博多なんですか」

夫「俳号だよ。松尾芭蕉にあやかってな。博多場所」

妻「お相撲じゃないですか」

夫「そんなのはどうでもいいんだ。見てみろ。俺の作った俳句が新聞に載ったんだ。ははは。スゴイだろう」

妻「ビギナーズラック？」

夫「そういうことを言うことないだろう。一生懸命勉強したから、名句が作れたんだ」

妻「名句？ いやだ、あなた、お化粧なさるの？」

夫「メイク……お化粧じゃないよ」

妻「浮いた浮いたと浜町河岸に」

夫「なんだそれは？」

妻「名句（明治）一代女」

夫「歌が古いよ。とにかく新聞に載ったんだ。今日はお祝いだから。なんかうまいもの作ってくれよ。俺はな、これから俳人として生きる」

妻「アルプスの少女？」

夫「それはハイジだ。俳人だよ」

妻「花も嵐も踏み越えて」

夫「なんだそれは？」

妻「愛染（俳人）かつら」

夫「だから、歌が古過ぎるんだよ。俳人だよ。松尾芭蕉とか」

妻「古池に飛び込むんですか？」

夫「芭蕉が飛び込むんじゃない。飛び込むのは蛙だ」

妻「なんでもいいですから、まあ、頑張ってください」

ルルルルルル。

妻「はい。いま、代わります。あなた、出版社からですよ」

夫「出版社？ あー、もしもし。えっ？ はい。はい。ホントですか！ わかりました。よろしくお願い致します」

妻「どうしたんですか」

夫「おい、母さん喜べ。いまな、新聞の俳句を見て、出版社から電話があったんだ。私の俳句は、個性的で独創的で、奥にキラリと光るモノがあるそうだ」

妻「個性的で独創的？ それって、ちゃんとしてないって意味でしょう。規格から外れている。常識じゃ考えられない」

夫「何を言ってるんだよ。芸術って言うのは、規格から外れてはじめて芸術だ。ピカソしかり、ジョルジュ・ブラックしかり」

妻「で、なんなんですか」

夫「出版社がね、私の句集を出版してくれるって。いよいよ、これで俳壇デビューだ」

妻「怪談のデブ？ 幽霊が太ってるの？」

夫「怪談のデブじゃない。俳壇デビューだよ。俺も明日から俳人だ」

妻「で？」

夫「ついてはだ。句集の出版に際し、制作費のうち三十万円を自己負担して欲しいと」

妻「はあ？ つまり自費出版ってことですか？」

夫「そうじゃないんだよ。ちゃんと書店でも販売して、印税で、三十万は一年後に戻って来るそうだ」

妻「それは怪しいですよ」

夫「怪しくないよ。俺の俳句を評価して、話をしてくれたんだ」

妻「いやね、あなたが趣味のために自費出版で句集を出すのはかまいませんよ。無駄でも趣味ですからね、諦めもしますけれど」

夫「無駄とはなんだ？」

妻「あなたの自己満足の句集を百部くらい作ってお友達に配るのは、別にいいですけど。

書店で売るといったら何千部も作るんですよ。普通に考えてくださいよ。売れるわけがない」

夫「そんなことないよ。出版社の人が絶対売れるって請け負ってくれたんだ。だから、三十万だよ。そのくらい、いいだろう」

妻「商業出版で著者に制作費を出せっていうの変でしょう。あとで返すって、売れなかったら返さないってことですよ。お金だけ取って、百部くらいしか刷らないで売れませんでしたっていう詐欺じゃないんですか」

夫「そんなことないよ。俺の俳句を高く評価してくれたんだ。人生で他人に褒められたことなんてなかった俺が、はじめてアカの他人から褒められたんだ。(泣く)いいじゃないか、三十万くらい」

妻「わかったわかった。普段から私が嘘にでも褒めてあげれば、こんなに簡単には騙されなかったんでしょう」

夫「なんだ、その言い方は」

妻「そういうのを褒め殺し商法って言って、二三年前からよく見掛けるそうですよ。気をつけなさいって、ほら、俳句の隣の、広告に出てるでしょう」

夫「広告？政府広報、悪質商法に気をつけよう……」

妻「個性的褒める言葉に要注意。出した金あとで戻るわけがない。騙されてじっと手を見る秋の午後。ほら、五七五で注意が書いてある」

夫「騙されていたのかなあ。とほほほほ。わかったよ。句集は諦めるよ」

ルルルルルルル。

妻「また電話だわ。えっ？私です。はい。はいはい。えっ、そうですか。まあ、そういうことでしたら、是非お願いしますわ」

夫「どうした母さん」

妻「いえね。出版社からなんですけれどね。ほら、この間、展覧会に出した私の絵、個性的で独創的で、奥にキラリと光るものがあるって。褒められた」

夫「褒められてないだろう」

妻「それでね、私の画集を、三十万円で出版しないかって」